

国際理解教育の推進

- テレビ会議、e-Learning -

山崎吉朗(日本私学教育研究所専任研究員)

今年度の研究に関して、1. テレビ会議による遠隔教育 2. e-Laerningによる遠隔教育 2つに関して報告する。何れもカリタス女子高校での事例である。

1. テレビ会議による遠隔教育

本年度(2006年度)は2回実施した。昨年(2006年)11月に、短期留学生在が1名、長期留学生在が1名来ていたマルセイユのドームエ高校との間で第一回目を行い、まだ長期留学生在がいる本年(2007年)の2月に第二回目を行った。

その二つの報告を行う。

1.1. 第一回目 2005年11月(Skype)

昨年の11月は Skype を使った。個人用の簡易テレビ会議システムとしてはたいへん普及しているものである。当初は、他のテレビ会議と同じ nice to meet you の予定で、教員同士の実験もしていたのだが、フランス側の方は技術的にかなり不安な状態だったので、予備として Skype を用意し、実験も行っていった。

結果的に本番前日のリハーサルで、nice to meet you でもどうしてもつながらず、予備として準備していた Skype で実施した。

結果はフランス側には音声も画像も届いて問題なかったようだが、日本側にはどちらも不十分で、ほとんど会議にならないという結果になった。画像は、少し動くと、お化けのような画像となり、音声もほんの一部しか聞こえず、ごく一部でしかやり取りができないという結果に終わった。

2月にフランス側に行き、担当者と話したが、フランス側には音声、画像ともきれいに届いていて、日本側できちんと届いていないということが、わからなかったそうである。

1.2. 第二回目 2006年2月(nice to meet you)

本年(2007年)2月に、昨年同様、筆者が渡仏し、技術指導を行い、実施した。

とにかく画像の負担が大きいことを説明し具体的な進行の仕方を説明した。即ち、何人もが一緒になって画面に登場し、次々と動くと、その負担で音声かとぎれてしまうので、1人か2人がカメラの前に座り、なるべく動かないようにして会議を行うという指示を出した。また、結果的にフランス側が用意したパソコンでは nice to meet you がうまく動作しないので、日本から持って行った Windows Vista の最新版パソコンを向こうのネットワークに接続し、nice to meet you で実施した。

音声の遅延はやはり5秒近くあったが、それまでの会議のように全く音が届かないということは基本的になく、過去のテレビ会議の中でももっとも順調に行われた会議となった。日本人の生徒はフランス語、フランス人の生徒は日本語という原則が全体を通してほぼ守られ、テレビ会議の目的である語学学習は、その目的を達することができたと言える。

テーマは、温暖化、バレンタインデー、復活祭ということで、あらかじめ、双方で準備して本番に臨んだ。いくつか興味深いやり取りがあったので紹介しておく。

まず、温暖化についてである。日本もフランスも今年の冬はとても暖かいというやり取りがあった後、日本

側から、温暖化の影響はフランスではどうかという質問をした。その質問に対し、何を答えたらいいのかわからないという様子で、暖かくてみんな喜んでいたりとか、Tシャツを着ることが出来て嬉しいとかいう答えばかりで、温暖化を憂慮するような発言はなかった。高校生レベルでは、フランスは日本程、温暖化についての懸念や不安がないのであろうか？ また、復活祭の話題の中で、日本側の、教会にはよく行くのかという質問に対し、笑い声起きて誰も行かないと答えていた。むしろ、そんな質問はおかしいという感じているフランス人の生徒達に対し、先生が、カリタスはカトリックの学校だからと説明して、生徒達は納得していた。フランス人の多くがカトリックだと思っている日本人にとってはいささか奇妙な答えに思えた。中には、カトリックということばがよく理解できていないと思われる生徒もいた。スカーフ問題が示しているように、フランスの学校教育は宗教と切り離されていることにも起因しているのかもしれないが、興味深かった。



日本の様子



フランスの様子

2 . e-Learning による遠隔教育

今年度は、まず、生徒のパソコン環境調査を実施し、e-Learning 実施可能と判断して、小テスト準備、定期テスト準備で e-Learning を利用した。

2.1. パソコン環境調査

授業の補充での本格運用の前に、家庭でのインターネット環境の調査を行った（対象34名）。table1、2、3で示すように、全家庭はパソコンを保有し、1名を除いてはパソコンでのインターネット利用が可能である。個人所有率は低く、14%であるが、毎日利用している生徒と週2、3回利用する生徒を合わせると、全体の7割近くになり、日常的にパソコンを利用している生徒は多いことがわかった。回線の種類については、課金の電話回線利用は1名で、回線の種類が不明というのが3割の家庭でも、少なくとも課金制ではない回線であることは確認できた。

table 1 (インターネット、パソコン環境)

パソコン所有	100 % (個人所有は14%)
インターネット環境	97 % (1名のみなし)

table 2 (利用頻度)

毎日	週2-3回	週1回	それ以下
39 %	29 %	6 %	26 %

table 3 (接続環境)

ADSL	FTTH	ケーブルTV	電話回線	不明
23 %	34 %	7 %	3 % (1名)	33%

2.2. 実施準備

昨年度の実験導入及び今年度のパソコン環境調査を経て、授業と連動した e-Learning を実践することにした。ただ、あくまで授業の補充としての運用である。即ち、演習するかどうかは生徒自身に任せ、強制はしていない。対象は前年度実験導入の対象にした生徒達である。4月なので高校3年生になっている。

最初の準備として、連絡手段としてのメーリングリストを作成し、情報は均等に行き渡るようにした。連絡の短い文章を送信するだけなので、登録するアドレスは、パソコンアドレスでも携帯アドレスでもどちらでも可とした。パソコンアドレスが8名、携帯アドレスが26名であった。授業で実施の予告はするが、最終的な連絡はこのメーリングリストで行うという形にした。

2.3. 小テスト準備

必然性のある利用としてやはりテスト準備が一番利用されるのではないかと考え、小テストの準備で e-Learning を実施することにした。形容詞、副詞の単語テストで、指示した単語集全体が範囲となっている。

小テストを実施する2日前の放課後にメーリングリストを使って連絡し、小テストの前の二晩、自宅で演習できるようにした。受講した生徒は34名中の23名である。受講しなかった11名のうち、2名はメーリングリストに登録するアドレスを指定日までに提供しなかった生徒、2名は家庭のパソコンが壊れていた生徒、e-Learning 環境があったのに受講しなかった生徒は7名だけであった。前述のインターネット環境がない1名は、学校のパソコンで演習していた。

アンケート結果は次の通りである。e-Learning の中に設定してあるアンケートに答えたのは13 / 34名である。

table 4 (小テスト準備についての4段階アンケート)

	そう思う	少し	あまり	思わない
難しかった?	15 %	54 %	23 %	8 %
量多かった?	8 %	0 %	69 %	23 %
役に立った?	100 %	0 %	0 %	0 %
記憶残った?	77 %	23 %	0 %	0 %
楽しかった?	92 %	8 %	0 %	0 %
今後も希望?	100 %	0 %	0 %	0 %

昨年度報告したアンケートより評価は高かった。実力テスト準備のような漠然としたものでなく、小テスト対策という形の具体的な演習の方が多く利用され、評価も高いことがわかった。やはり、授業との連動というのは重要であるし、授業の補充としての位置づけの方が生徒は熱心に取り組むということであろう。

また、記述アンケートでは次のような回答があった。

「いつもどうしても A から順番に見てしまうので、このようにランダムに出題されるのはとても勉強になりました」「初めの方は結構わかったけどだんだん解けなくなった。何回もできるからすごく役にたった!!!! これからもいっぱいやろうと思いました」「普通の勉強と違ってパソコンだと、楽しいし、ゲーム感覚で出来るって、覚えやすかった。こういう terra みたいなのは初めてだからすごい新鮮だった。これからもいっぱい活用していきます。」

個人での学習でできないことを e-Learning で補充しているということがわかる。また、何度も繰り返してできるのはコンピュータの特性である。ゲーム感覚が学習意欲につながる好例であると考えられる。

2.4. 定期試験対策での利用

定期テストでの対策については、小テストとは違った配慮が必要となる。全員が自由に使える環境にないことがわかっているので、得点に密接に結びつく、すなわち成績に関わるような演習を行うのは難しい。そこで、次の原則に則って演習問題を作成することにした。

1. 最後の確認テストとして実施 前日に公開
2. テストの一部で実施 15点 / 100点分の問題 (前置詞、冠詞、派生語) に限定する
3. 授業の復習のレベルにとどめる
4. 15点分の範囲 (前置詞、冠詞、派生語) についても、e-Learning に出題した問題以外も出題

趣旨は、e-Learning 使用の有無による有利不利が大きく出ないようにするということである。試験直前の確認演習問題という位置づけとした。100点満点のテストで、僅か15点分の配点である。さらに、その15点分のと

ころでも e-Learning で出した以外の問題を出題するので、それだけを元に試験勉強をしても、15点分のところも満点がとれないようにした。

利用者は、小テストの時を下回ったが、15/34名が利用した。評価も table 5 の通りである。なお、このアンケートは、試験を終了した直後に実施した紙によるアンケートである。e-Learning 上でのアンケートの回答率が低かったので、急遽印刷して実施した。

table 5 (定期テスト準備についての4段階アンケート)

	そう思う	少し	あまり	思わない
難しかった?	0 %	57 %	43 %	0 %
量多かった?	0 %	0 %	57 %	43 %
役に立った?	100 %	0 %	0 %	0 %
記憶残った?	86 %	14 %	0 %	0 %
楽しかった?	57 %	43 %	0 %	0 %
今後も希望?	86 %	14 %	0 %	0 %

小テスト準備と同じような高い評価を与えていることがわかる。

紙による全員提出のアンケートでの集計なので、利用した生徒しか答えないコンピュータ上でのアンケートではわからないことを知ることができた。それは、なぜ使わなかったかの理由である。使わなかった19名の生徒の理由の内訳は次の通りである。

24 % (8 / 34名) 時間がなかった

24 % (8 / 34名) パソコンが壊れていた、あるいは古い

6 % (2 / 34名) 家族が使っていた。

3 % (1 / 34名) インターネット環境がない(但し友人が印刷したもので確認)

15点配点分だけの演習なので、他の準備もしなければいけない試験前日に、e-Learning の演習に時間を割くことのできなかった生徒が多かったことがわかる。

また、記述アンケートでは、次のような回答があった。

「自分が何を復習するべきなのかが分かりました」「前置詞問題も、中に埋めながら授業を思い出して、訳と確認したりできるので、とっても役に立ちました」「派生語を Terra でも確認できて勉強になりました。素早く直前チェックができてよかったです」

復習として利用して、効果があったことがわかる。あくまで復習問題として作問したこちら側の意図に合致した回答であった。

3. まとめ

今回の事例から次の4点が知見として得られた。

1. 授業の補充としては効果をあげることが可能。従って授業不足を補うことができる。
2. 利用している学習者の評価は高く、継続的な利用を望んでいる
3. 必修にすることは難しい。
4. 上位層が多く利用する傾向にある。

次年度は、他校と協力して、e-Learning の検証をするなど、さらに発展して利用していきたい。